

ドイツ近代文献学のトポスとしての「書庫」 ——E.T.A. ホフマン『黄金の壺』をめぐって

土屋京子

1. はじめに——近代以降の図書館史概観

ここ数十年で、ハイブリッド・ライブラリーというフレーズがとりわけ研究機関の図書館の方向性を示すうえで、盛んに耳にされた。インターネット利用の普及が爆発的に進むなかでマルチメディアによる知が氾濫し、今後の図書館の可能性を占いつつ、所蔵資料の中でも古文書や地図、古写真のみならずビラやパンフレットなどのあらゆる書字、画像資料が、それもほとんど選別もされずにデジタル画像として保存され、広く一般公開されるようになった。この状況は、全世界的に拡がりを見せているプロジェクトであり、先進国のなかで日本はどちらかというと後手に回っている感がある。¹ ハイブリッドとはつまり、現時点では書籍・雑誌を中心とする従来型の図書館と、インターネット上で電子資料を提供するバーチャルな図書館、このふたつを兼ね備えているという意味なのであるが、三次元スキャナーの導入などの技術革新により、電子機能によるバーチャルな資料の三次元化、四次元化の実現を臨み、人間と世界のアクチュアルな関係性をも含めた問題領域を包括するうえで、これまでの従来型の図書館空間はすでに終焉を迎えているという認識は強くなっている。この傾向はおそらくコロナ禍で全世界的に体験した日常下でのオンラインでの生活様式によって加速され、これからはますますドラスティックに進行するであろう。

そもそも従来型の図書館は19世紀、ドイツの高等教育機関の図書館においてモデルを見出される。イギリスやフランスなどに比して、産業革命やその他さまざまな近代化に後れをとっていたドイツでは、国民を教化する機関としての博物館や図書館といった、組織的に行う国民の教養のための設備の充実は必要不可欠であった。近代的な図書館、それは、文献学的に確定された真正なテキストのみを収集するという、アカデミックな意味においては密閉かつ閉鎖的な空間であったが、同時に広く国民に対して学問的に体系化された知を開放するという理念を掲げていた。この意味において、書物を所有すること自体に主な価値を見だしていたそれ以前の蔵書形態とはおおきく一線を画していたのである。

このような近代的図書空間構想の先鞭は、図書館司書兼外交官であったライプニッツ（1646-1716）であろう。彼はヨーロッパ最初の独立建造物図書館であるヴォルフエンビュッテル図書館の

©高知大学人文社会科学部 人文社会科学科 国際社会コース

E.T.A. Hoffmann 作品からの引用は本稿では次のテキストを使用する。Hoffmann, E. T. A.: Sämtliche Werke. Hrsg. von Hartmut Steinecke und Wulf Segebrecht unter Mitarbeit von Gerhard Allroggen, Friedhelm Auhuber, Hartmut Mangold und Ursula Segebrecht. 6 Bände. Frankfurt a. M. 1985ff. 以下この文献に関しては、巻数と頁数で記す。

¹ 杉田茂樹「ネット時代の大学図書館活動の新機軸」、『言語』37号(9)、大修館書店2009年、58-65頁所収、58-59頁。

完成に携わり、図書の分類方法を独自に編み出したばかりではなく²、図書館とは「あらゆる時代、あらゆる民族の最も偉大な人物たちがその優れた思想を語り伝える場」であり、「人間のための百科全書」、「すべての科学の宝庫」であるという理想を掲げ、旧来の図書館が基本方針としていた図書の閲覧や施設の公開制限に対して、来るべき啓蒙の世紀のために積極的に市民にも図書を開放していくという普遍主義的理想を掲げた。³ 彼の図書館学は、後に、同図書館の司書となるゴットホルト・エフライム・レッシングへと受け継がれ、啓蒙思潮のもとに図書館は文献学のみならず、あらゆる近代科学一般すべてに資する機関となった。このようにして、所蔵・管理・閲覧という三つの機能を備えた近代的図書館が市や大学ごとに設置され、学術研究の中心的拠点として機能していくようになるのである。

このような近代的図書館がドイツをはじめとして、ヨーロッパ各地に誕生し、発展していく一方で、それ以前に文献を蒐集し保管していた個人の趣味による多様極まりないコレクション室兼仕事部屋としてのクンストカマーの系譜からなる図書館や書斎もいまだ多くヨーロッパ各地に残されていた。それらクンストカマーの創始であり、かつその典型であった16世紀ボローニャ大学の自然哲学教授ウルリッセ・アルドロヴァンディ（1522-1605）の蒐集室は、1万4千点を越える膨大な珍品コレクションならびに彼自身が記録した1万を超えるテンペラ画や版画、書物が、天井にまで到達する巨大な棚に所せましと並べられていたが、彼の死後しばらくしてからこの膨大なコレクションのうち、書字資料を分けて収集するための図書館が併設されることになる。このモノと書物の集積からなる二つの空間は、ともに互いを補いあうようなかたちで、宇宙の入り組んだ複雑な秩序を人に体験させるトポスとして現在もなお機能している。

このようなクンストカマーの横に図書館が併設されている、あるいはクンストカマーと図書館とが一体型になっている施設は、アルドロヴァンディが例外というわけではなく、むしろ16世紀から18世紀半ばまではそれほど珍しくはなかった。⁴ このような言わば知的に秘匿された小部屋としての書斎あるいは図書館のあり方は、16世紀以降、貴族や高位聖職者、学者が権力誇示や個人的な収集癖のために作る部屋としてのクンストカマーのなかに受け継がれ、文字による記録というかたちで保存された人間精神としての書物や古文書もまた当然のことながら収集の対象となり、それらを保管し、閲覧するための図書館としての機能をすでに果たしていたのである。いや、そもそも先に説明した近代的図書館が、遡ること2000年、アリストテレスによって確立された整理方式に従い、体系的な資料収集によって築かれた古代ギリシアの人類最初のアカデミア図書館にその原点を見出すことができるならば、中世キリスト教における修道院が聖遺物を蒐集し、神聖な書物である聖書の唯一者性という権威に基づき、古文書を蒐集、独占するうえでの書庫兼筆耕室に後者の起源の一つを見出すことができる。しかし、これらの貴族のコレクションのほとんどは近代的図書館の登場とともに、州や地方の図書館に吸収されることになる。

本稿では、一室のうちに世界の縮尺図を描きだし、無生物から人間に至り、大宇宙までを観照するという理念のもと造られたクンストカマーに起源を有する空間が、原克曰く、「近代はもっぱら

² それまで図書館の書物の並べ方は、であったのだが、ライプニッツは、スイスのコンラート・フォン・ゲスナー（1516-1565）、フランスのニコラ・クレマン（1659-1712）などの分類法を参考にして、ライプニッツは大学の専門に合わせて、哲学、数学、物理学といった学問分野ごとに書物を分類した。

³ 田山泰三「ライプニッツの図書館活動」、『ライプニッツ読本』138-139頁・椎名六郎「ライプニッツの図書館活動」『椎名六郎先生図書館学論文集』198頁。

⁴ 小宮正安「ヴァンダーカンマーとしての図書館」、『言語』37号(9)、大修館書店2009年、74-77頁所収。

書物の「読み」を思考の主体としての個人に還元するプログラムであった⁵ というような個人体験としての書字の世界へと還元されていき、研究機関としての近代的図書館や個人所有の書齋が成立していく19世紀半ばまでの過程を、1814年に公刊されたドイツロマン主義作家 E.T.A. ホフマンの『黄金の壺』における書齋と青の図書館、そして最後の場面で描かれる屋根裏部屋のモチーフを中心に解釈をしながら追っていくこととしたい。

2. 書齋と青い図書館

ホフマンみずから会心の作であると称し、同時代人からも創作メルヒェンの典型であるという評価を与えられた『黄金の壺』は、アンゼルスというごく平凡な青年が主人公の物語である。19世紀初頭のドレスデンの街中で日常生活のとるに足りない悩みをぶちまける苦学生の彼は、しかし、火の精リントホルストの娘であり、蛇の姿となって現れるゼルペンティーナとの遭遇によって運命を一変させる。メルヒェンの枢軸に沿って、物書きとしての数々の試練を経た最後には、世界の真の認識へと開眼し、ゼルペンティーナを胸に抱きながら理想郷アトランティスへ旅立っていく。

全十二夜話からなるこの物語のちょうど真ん中に位置する第六の夜話で、アンゼルスに大きな転機が訪れる。ここでアンゼルスははじめて文書管理官として姿を現わした火の精リントホルストに写本の仕事を与えられ、彼の仕事部屋である書齋に招き入れられる。その場面は以下のとおりである。

文書管理官リントホルストはゆったりとしたダマスクス織の部屋着姿で姿を現し、「さあ、アンゼルスさん、やっと約束を守ってくださいましたな、うれしい限りです、私の後についてきてくださればよい、さっそく実験室にまであなたをお連れしなければいけませんので」と声をかけました。そうしてリントホルストは長い廊下をずんずんと進んでいき、ある廊下へとつづく隅の小さなドアを開けました。アンゼルスはほっとして、この文書管理官の後ろからついていきました。彼らは廊下からある広間にでました、というよりも、むしろそこは見事な温室でした。というのも両側には天井に至るまでありとあらゆる珍しくも摩訶不思議な草花が咲いていて、それに奇妙な形の葉や花をつけた巨木たち。窓などはまったく見あたらなかったにもかかわらず、いったいどこから射しこんでくるのだろうか、魔法のような眩しい光があちらこちらで輝いていました。学生アンゼルスが茂みや木々の間から覗いてみると長い回廊ははるか彼方にまで伸びているかのようでした。深く茂った糸杉の暗がりのなかで大理石の水盤がほのかに光り輝き、そこから見事な彫像たちが聳えたち、クリスタルのような水を噴きあげながらユリの萼のなかへとびちゃびちゃと降り注いでいました。奇妙な声々がざわめき、不可思議な植物からなる森を抜けて音を立て、すばらしい香りが上へ下へと漂っていたのです。かの文書管理官は姿を消し、アンゼルスには炎のような紅ユリの巨大な群生しか見えませんでした。この妖精の庭の眺めと甘い香りにうっとりとして酔いしれて、アンゼルスは魔法にかけられたかのように立ち尽くしてしまったのです。(II/1, 269f.)

アンゼルスはこの「妖精の庭」である室内植物園を抜けて、鳥類たちと言葉を交わしながら、

⁵ 原克「検索という迷宮——バロック的知的の序列からハイパー検索へ」、『言語』37号(9)、大修館書店2009年、66-77頁所収、77頁。

文書管理官に導かれ、ようやく「青の図書館」と呼ばれる部屋にたどり着く。

ついに彼らは大きな部屋へと足を踏み入れました。そこで文書管理官は上のほうに目をやって立ちどまったので、アンゼルスには、この広間の簡素な装飾がつくりだすこのすばらしい光景を見て楽しむ余裕ができました。この紺碧の壁からは高い棕櫚の木の金褐色の枝が伸び出ており、そのきらめくエメラルドのような輝きを放つ巨大な葉が丸天井を形作っていました。この部屋の中央には黒ずんだブロンズで鑄造された三体のエジプト風ライオン、そのうえに乗せられた斑岩の一枚板があり、さらにそのうえには黄金でできた簡素な壺が乗せられていました。それが視界に入るやいなや、アンゼルスはその壺から目が離せなくなってしまいました。光を発している磨きあげられた金の表面には、あらゆる形象が無数のほのかにきらめく反映となって戯れ、ときにそれは憧れに両腕を広げた彼自身の姿のようにも見えました。ああ、ニワトコの茂みの横に、ゼルペンティーナが身をくねらせながら上へ下へとはっている、このうえなく愛らしいまなざしで彼を見つめながら。アンゼルスは狂気に似た陶酔に陥って我を忘れましました。「ゼルペンティーナ、ゼルペンティーナ」と大声で叫んだのですが、文書管理官リントホルストはすばやく振り返り、そうして言いました。「いったいどうしたのです、アンゼルスさんよ、あなたは私の娘を呼びたいようですが、あの子はしかしながら家の反対側の自分の部屋にいて、ピアノの時間なのですよ、さあ、ついて来なされ。」アンゼルスはほとんど呆然自失のまま先へと進む文書管理官についていき、文書管理官が強く彼の手を握り、声をかけるまでは、なにも目に映らなかつたし、なにも耳にも入ってきませんでした。「さて、到着しました！」アンゼルスは夢から目が覚めたかのように目をぱちくりとさせ、いまや自分が周りをぐるりと高い本棚で囲まれた部屋にいることに気がつきました、そこは通常の図書館の、あるいは研究室のような部屋とほとんど変わった様子ではありませんでした。中央には大きな仕事机とその前に皮張りの肘掛椅子がありました。「これが」と文書管理官リントホルストは言いました。「当面、あなたの仕事部屋です。ゆくゆく青い図書室で、そう、あなたが突然私の娘の名前を呼んだあの部屋で仕事をするかどうかは、まだわかりかねます。けれどもいまのところはまずあなたが、与えられた仕事に対して、私の期待と要望どおりにじっさいに遂行できるかという能力を示して見せてほしいものです。」(II/1, 271f.)

そしてアンゼルスは、リントホルストの所有する「アラビアやエジプトの古語による原稿、さらにはどの国語にも属さない奇妙な文字で書かれた極めて貴重な原稿」(II/1, 242)を、書斎で次々と書き写していく。そして姿を現さぬゼルペンティーナの、ただ声による励ましのもとで、「陶然としてその音を聴いていると、見慣れぬ文字がしだいに解読できるようになってきます」という未知の力が覚醒した状態にまで到達する。(II/1, 274) そうしてとうとう第八の夜話で、文書管理官の「今日はこちらから入ってきなさい、アンゼルスさん、バガバット・ギーターのマイスターが我々をお待ちしている、あの部屋に行かねばなりません」(II/1, 284)という呼びかけのもとに、青い図書館で仕事をするようになるのだ。

これまでこの『黄金の壺』のもっとも重要な場面で描かれる棕櫚の木で覆われた青い図書館について、さまざまな研究者たちが解釈してきたが、それは大きく二つの方向性に分けられる。そのひとつがホフマンの伝記的事実に基づいたモデルの特定である。Holzhausen (1984)はこの図書

館に具体的なモデルがあったことを論証している。⁶ それは17世紀にプロイセン公爵領のヴァレンロット公爵によって造られたケーニヒスベルクにある私設図書館である。マルティン (1570-1632) ならびにその息子であるヨハン・エルンスト (1615-1697) の時代には、かなり熱心に貴重な書物や古写本を蒐集し、それらを私設図書館に収め、個人的な蒐集欲とそれらによって示される顕示欲を満たしていた。しかし、この私設図書館は、1650年を境にケーニヒスベルクドームの一室へと移され、その後、ケーニヒスベルク大学の教授や学生が本の収集ならびに整理にあたることにより、体系的に書物が収集されるようになる。同時に、ヨハン・エルンストが自らの旅行の折に収集してきた異国の貴重品や珍品、地球儀や自然の産物などを図書館に展示したために、さながら地理学博物館のような機能を果たしていたという。

1776年に生まれてから1796年までケーニヒスベルクにいたホフマンは、とりわけ1790年から1791年にクリスチアン・ヴィルヘルム・ポドルフスキーのもとでオルガンのレッスンを受けるためにケーニヒスベルクドームへと足しげく通っていたらしい。そのオルガンの後ろにちょうど位置していた小さな南塔へと登っていく回廊の先に、二室からなる図書室への扉があった。すでに当時のヴァレンロット公爵は、図書室の書物の収集や使用をほとんどケーニヒスベルク大学の学生たちに委ねていたので、その後、同大学で法学を修めたホフマンも自由に出入りすることができたはずである。この図書室の内装はバロック様式に拠るもので、その支柱は緑に塗られた棕櫚の幹のような形状であり、葉の装飾がつけられ、また部屋のアーチ状の天井には黄金のツタの装飾がついていたという。さきほど引用した『黄金の壺』の記述と合わせて見ていくと、その描写がさまざまな点で実在の図書室と一致することがわかる。二室からなる図書室には7000の書物と200をくだらないオリエントの貴重な写本、羊皮紙が所蔵されていたという。さらに部屋の中央には古い机や革張りの椅子、さらには第九の夜話で、原稿にインクの染みをつけたさいにアンゼルススの前に出現する恐ろしい蛇を思わせるような蛇の置物や、原典の羊皮紙にインクの染みをつけた咎でアンゼルススが閉じ込められるガラスの器などの小道具も、すべてこの図書室に展示されていたようだ。Holzhausen (1984) では、ヴァレンロット公爵図書館の収蔵品を列挙しながら『黄金の壺』の青の図書館の描写と照合し、物語を読み解いていく。アンゼルススが筆耕の仕事に耳にするゼルペンティーナの声、クリスタルの音の響きは、若きホフマンがケーニヒスベルクドームで聞いていたオルガンの音色だったのではないだろうか、と。このようにデータを基にした論証により、クンストカンマーに起源をもつケーニヒスベルクドームの図書室が『黄金の壺』における青い図書館のモデルであったことは、憶測に基づく危うさはあるものの、説得力のある分析となっている。

それに対して Oestale (1991) は、当時のドイツロマン主義において、フランスの妖精物語からの影響のもとで創作メルヒェンが多く作家たちの好題になると同時に、民間メルヒェンの収集が熱を帯びる時代状況を、『黄金の壺』に重ねて読んでいる。⁷ すなわち、はじめにアンゼルススがリントホルストの邸宅に足を踏み入れたさいに「妖精の庭」が広がる光景は、はじめてフランスの妖精物語にふれたドイツ文学者たちの心証イメージを可視化しているのではないかと。そして、この物語の第六の夜話でアンゼルススはただただ文字を書き連ねていくという規則的な運動性

⁶ Holzhausen, Hans-Dieter: Die Palmenbibliothek in E.T. A. Hoffmanns Märchen Der goldne Topf: Einige Randbemerkungen zu ihrem Vorbild im Dom zu Königsberg/Preussen. In: Mitteilungen der E.T.A.-Hoffmann Gesellschaft Bamberg-e.V. 30 (1984), S. 34-41.

⁷ Oesterle, Günter: Arabeske, Schrift und Poesie in E.T.A. Hoffmanns Kunstmärchen „Der goldne Topf“. In: Athenäum 1 (1991), S. 69-107.

に基づいて筆耕の仕事を行なうのは、「小部屋 Kabinett」(II/1, 275) と呼ばれる空間であり、しかしその後、リントホルストに彼の娘ゼルペンティーナの婚として見込まれ、第八の夜話で彼女とともに、一枚の棕櫚の葉に書かれた神話「火の精とみどり蛇との婚礼」を終わりまで書き写す仕事を完遂するのは、すでに述べた通り「青の図書館 blaue(n) Bibliotheksaal」である。「Kabinett」は、18世紀に啓蒙主義の理念のもとで悟性的に編まれた „Das Cabinet der Feen“(1761/66) を、そして「Blaue Bibliothek」は、Friedrich Justin Bertuch を中心にしてロマン主義的プログラムのもと、ありとあらゆる民族のメルヒェンや伝説、冒険譚、長編小説といったジャンルも問わずに膨大に収集した、「知られているすべての文学のアラベスクとグロテスクをむやみやたらと継続的に収集した」12巻からなる „Die Blaue Bibliothek aller Nationen“ (1790-1800[?]) を連想させる。ただただ書き写すだけの仕事を行う空間の Kabinette から、自然の声を聴く詩人の部屋 Blaue Bibliothek へ、このふたつの民話蒐集で表される幻想的空間の移行を、散文的な筆耕から森羅万象へと身を解き放つロマン主義的詩人へと才能を開花させるアンゼルス自身の姿に重ね合わせているというのだ。

そもそもロマン主義の文学において図書館という装置は、自由な想像力の戯れを可能にする、Nikolas Immer の表現を借りれば、「インスピレーションの空間、体感的感動空間」であった。アイヒェンドルフの最初の長編小説である『予感と現在』の主人公フリードリヒは恋人の一人であるユーリエと恋に落ちるのは、彼女に導かれ訪れる彼女の父親の図書館であるし、またティークのファンタズスのいくつかの作品『絵画』(1821) や『生の余剰』(1839) でも図書館のモチーフは大きな位置を占めている。そして図書館の一部を構成している一冊の書物も同時に、図書館を圧縮したモチーフとしてライトモチーフになる。たとえばノヴァーリスは自身の代表作である『ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン』について、A.W. シュレーゲルの妻カロリーネ・シュレーゲルに宛てた1799年2月27日付けの手紙で「私は一冊の長編小説に全生命の欲求を向けました——それは図書館そのものと比肩することでしょう」⁸と書き綴っている。また晩年のホフマンの作品『花嫁選び』(1820) では三人の花婿候補がひとりの花嫁を巡って三つの小箱によって抽選されることになるのだが、枢密官房書記官が選ぶそのうちのひとつには羊皮紙でできた白紙の小さな本が入っている。この小箱を作った金細工師曰く、「この本によって、これまで誰も所有したことがないような、豊か極まる、完璧な図書館を手にいれたばかりではなく、さらに身につけて持ち運べるのですよ」(IV, 714) というとおり、現代でいう Kindle などの電子書籍のように、所有者の意のままにさまざまな内容に化ける魔法の本だった。この知と欲望を満たす本を手にいれた書記官は、もはや花嫁には興味を示さず、不思議な本によってもたらされる、フーコの表現を充てれば、「19世紀に発見されたある種の想像力の空間」「幻想の図書館」のなかにどっぷりと身を浸すことになるのだ。⁹

3. ロマン主義的翻訳欲動と世界書物の複数性、一冊の本

一方で、アンゼルスはこの枢密官房書記官のようにただむさぼり「読む」という受け身ではない、ゼルペンティーナの助けを得て、異国の文字を書き移しながら、その内容を読解するという境地にまでいたる。同時代において、すでに触れたようにフランスの妖精物語に刺激を受け、ヘルダーか

⁸ Novalis: Schriften: Die Werke Friedrich von Hardenbergs. Band IV. Lebensdokumente. Stuttgart 1975. S. 281.

⁹ ミシェル・フーコー (工藤庸子訳)『幻想の図書館』、哲学書房1991年、18頁。

らグリム兄弟まで、民話や民衆詩、中世の詩歌や抒情詩を復活させるという一大プロジェクトが行われるが、これはいわば一種の言語内翻訳であり、「これによりドイツ文学はテーマや物語の単なるストックというにとどまらぬ、巨大な形式の宝庫を手にするようになった」と、アントワヌ・ベルマンは分析している。¹⁰ ロマン主義は中世への憧憬から古写本を発掘して翻訳し、またセルバンテスやシェクスピアなど、文学の様々な時代に遡る、他言語翻訳者たちが活躍した時代であった。アンゼルスがはじめて踏み入れる青い図書館で「火の精とみどり蛇の婚礼」の原稿の仕事をすまえるに、リントホルストが『バガバット・ギター』の名前を出すのも、もちろんまったくのホフマンの思いつきではない。A.W. シュレーゲルによるラテン語版は1823年、W. フンボルトによるドイツ語版ができるのは1826年、つまり『黄金の壺』が執筆された後ではあるが、ホフマンが常に創作上のインスピレーションを受け入っていた G.H. v. シューベルトの『自然科学の夜の側面』(1808) や、同年に行われた『インド人の言語と英知について』(1808) などのシュレーゲルの一連の講義に代表されるように、言語のあるいはポエジーの起源をオリエントに見ようとした当時の思潮により、マーハバラータのなかのとりわけ『バガバット・ギター』はヨーロッパ文学の原点にあたる聖典のひとつとして神格化されたのである。

このような文学者たちは図書館に通い、あるいはゲーテのものほど立派ではなかったかもしれないが書齋に閉じこもり、本に囲まれ、本のなかの世界に身を沈めた。「自然という書物」あるいは「世界という書物」という隠喩に表現されるような、「被造物は啓示の文字であり、人間および世界は神が語りかける書物であるという神学的基本構図」¹¹ そのものが、翻訳を中心に発展した文学史においても自然科学においても世俗的に解釈され、世界の読解への実現に向けた実践へと移されていくようになる。物語内のアンゼルムスの行為も、世俗化された聖典解釈の仕事のひとつとしてホフマンは描き出そうとしたのではないか。

そしてロマン主義の時代に一度は失効した「自然や世界を統べる一冊の本」としての聖書の唯一性は、象徴的な意味において、文学作品のなかで息を吹き返すことになる。1798年11月7日ノヴァーリスは F. シュレーゲルに宛てて次のように書いている。「学問体系について——そしてその本体である書物についてじっくり考えていったら、私も聖書という理念にいきつきました——聖書——それはあらゆる書物の理想のことです。」¹² そして一般草稿571番では「あらゆる学問は一つの書物を成す。(中略) 完成された聖書は完璧な、よく分類された図書館です。聖書の図解は同時に図書館の図解でもあるのです」と書き記している。¹³ 『黄金の壺』において、リンゴや木に戯れる蛇、一対の男女の楽園回帰といったモチーフが聖書に由来するものであるということは指摘されているが、これらのモチーフとともに、アンゼルスにとっても唯一無二である神話としての「火の精とみどり蛇の婚礼」、図書館というトポス、そして最終的に植物や動物たち森羅万象が意味を開示し「愛」「信仰」「認識」が調和した世界、これらは当時のロマン主義における文学史のディスクールを踏まえたモチーフ、筋立てとなっている。アンゼルスは数多の古典にあたり、翻訳という営為を通じて、みずから知の集積体の世界のなかに身を投じるのである。

¹⁰ アントワヌ・ベルマン (藤田省一訳) 『他者と言う試練——ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房、2008年、29頁。

¹¹ 原克『書物の図像学——炎上する図書館・亀裂のはしる書き物机・空っぽのインク壺』三元社1993年、66頁。

¹² Novalis: Schriften: Die Werke Friedrich von Hardenbergs. Band IV. Lebensdokumente. Stuttgart 1975, S. 262.

¹³ Novalis: Schriften: Die Werke Friedrich von Hardenbergs. Band III. Das philosophische Werk II. Stuttgart 1975, S. 365.

またアンゼルムスの恋人であるゼルベンティーナの蛇としての形象が18世紀音響学における声紋の図形、あるいは手書き文字を想起させることは指摘されてきたが¹⁴、女であることについては説得力のある分析はされてこなかった。しかし、当時の文献学における翻訳論では、原典を女に擬えることは珍しくなかった。¹⁵ たとえば、A. W. シュレーゲルはシェークスピアの「詩」的翻訳のプロジェクトにおいて、「ありのまま翻訳されなければならない」「それは自分の恋人から雀斑が消し去られてしまうのを欲する男など一人としていないのと同じことである」と述べているし、ヘルダーの „Ueber die neue deutsche Litteratur. Fragmente.“(1768)では、「翻訳をまったく知らない言語は、種族の異なる男と交際した経験がなく、それゆえ二種類の血統が合わさった子を産んだことがない乙女と同じであり、いまだ純潔で無垢の状態を保ち、民族の性質を性格に映すものなのである」¹⁶と、かなりセクシャルな表現を用いて、言語と翻訳の関係を説明している。『黄金の壺』において、文書管理官リントホルストが、娘のように大事にしていた原典、それをアンゼルムスは文献学者として翻訳し、そして我が物とする、このような当時の一種プロトタイプ of 文献学者の姿が投じられているのではないだろうか。それゆえに図書館と書齋は大きな役割をこの作品で占めることになるのだ。

4. 散文的な仕事部屋へ

しかし『黄金の壺』は、このアンゼルムスの幸福のうちに話が終わるわけではない。アンゼルムスの物語を伝えるのは、架空の著者として最終話にのみ姿を現す語り手の「私」である。彼は「ああ、幸せなアンゼルムス、君は日常の重荷を放りだして、愛らしいゼルベンティーナとの愛に翼を強く羽ばたかせた、そしていまや悦楽と歓喜のうちにアトランティスの領地で生活を送っているのだ！ただ、私は哀れなのだ！すぐに、そう私自身は数分もしたら、アトランティスの領地には遠く及ばないにしてもこの美しい広間をお暇し、自分の小さな屋根裏部屋に身を置き、生活をしていくうえでしなきゃならないみすばらしいことに頭を悩ませる、そして濃い霧のように、数多の災いによって視界が閉ざされているので、おそらくあのユリを見ることは決してかなわないのだ」と嘆く。(II/1, 321) それに対して、リントホルストは「落ち着いて、落ち着いて、あなた。そう嘆きなさんな。あなたもたった今アトランティスにいたではないですか、それにあなたも自身の感覚の内に詩的所有地として少なくとも農地のようなものをお持ちではないですか？ いったいそもそもアンゼルムスの至福とはある種のポエジーにおける生命のようなもので、自然の最も深奥にある秘密としてあらゆる存在の聖なる調和として開示されているのではないですか」と返す。(II/1, 321)

1791年に出版された „Historisch-litterarisch-bibliographisches Magazin“ が告げるところによれば、18世紀後半においてもなお、個人の所有する書齋で大規模なものは学者や文学者たちにおいてかなり珍しかった。「青の図書館」はあくまでも文学者の夢想のうちに立ち現れるもの、あるいは書字世界の寓意でしかない。当のホフマンも、とりわけナポレオン戦争のあおりを受けて、書齋を

¹⁴ Oesterle, Günter: Arabeske, Schrift und Poesie in E.T.A. Hoffmanns Kunstmärchen „Der goldne Topf“. In: Athenäum 1 (1991), S. 69-107.

¹⁵ アントワヌ・ベルマン (藤田省一訳) 『他者と言う試練——ロマン主義ドイツの文化と翻訳』 みすず書房、2008年、270頁。

¹⁶ Herder, Johann Gottfried : Sämtliche Werke. Band 1. Frühe Schriften 1764-1772. Frankfurt a. M. 1985, S. 646.

構えるどころか住居を転々とせざるを得ず、読書をするのはもっぱら貸本屋を通じてであった。それゆえにこそ、ケーニヒスベルクの青年時代の図書館体験とロマン主義の時代に好まれたドイツ近代文学史のトポスとしての「書庫」とが、『黄金の壺』における図書館のモチーフとしてダイナミックにイメージを補いあっている。そして、最初に述べたとおり、19世紀以降、図書館が近代化され、また出版業も爆発的に発展し、ロマン主義の時代における「書庫」のモチーフは解体、あるいは散文化していくことになる。

